様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３０９１

研究課題名（和文）精神医学の社会的基盤：対話的アプローチの精神医学への影響と意義に関する学際的研究

研究課題名（英文）Social Basis of Psychiatry: An interdisciplinary study of the significance and impact of the dialogical approaches to psychiatry

研究代表者
石原　孝二（Ishihara, Kohji）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：３０２９１９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、オープンダイアローグの歴史的経緯と社会的基盤、哲学的・思想的基盤、各国での展開状況などについて研究するとともに、日本への導入可能性について検討した。また、オープンダイアローグとトリエステモデル、当事者研究などの共通点と違いについて検討を加えながら、精神科医療における対話的アプローチの意義に関する研究を進めた。さらに、生物・心理・社会モデル、精神疾患診断の社会的影響、認知症当事者運動の研究なども行った。本研究の成果の重要な部分は、現在編集作業が進められている『オープンダイアローグの哲学』（仮題・石原孝二、斎藤環編、全2巻予定）の各章として出版される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義は、「対話的アプローチ」として特徴づけた精神科医療のアプローチの歴史的な経緯と思想的基盤、精神科医療に対する影響などを様々な視点から明らかにしたことにある。特にオープンダイアローグに関しては関連するアプローチと比較しながら詳細に検討し、日本における導入の可能性についても検討を進めた。対話的アプローチに対する社会的関心が高まる中、今後の実践と研究に関する重要な基礎を提供できたものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This research has elucidated the history and socio-political background of the development of the Open Dialogue (OD) Approach, the philosophical basis of OD, and the possibility of introducing OD into Japanese psychiatric services. We have also investigated the significance of Dialogical Approaches in view of the common features and differences among OD, the Trieste Model, Tojisha-Kenkyu, and other approaches (or activities.) The Bio-Psycho-Social Model, the social influence of psychiatric diagnosis, and the Dementia Tojisha Movement have been also investigated. An important part of the results of this research will be published in Philosophy of Open Dialogue (2 vol., K. Ishihara and T. Saito, eds., in preparation).

研究分野：哲学

キーワード：オープンダイアローグ　対話的アプローチ　当事者研究　当事者運動　精神疾患（障害）の診断・分類　トリエステモデル　生物・心理・社会モデル　地域精神医療

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

精神科医療のアプローチとして、フィンランドの西ラップランド地方で開発されてきたオープンダイアローグが近年国際的な注目を集めている。本アプローチは、対話による「治療ミーティング」をその中心としながら、（必要に応じて）24 時間以内の治療ミーティングを行う即時援助や治療チームのメンバーの継続性などを原則とし、整備された地域精神医療システムという側面も有している。本アプローチは、精神科医療の主流となっているアプローチとは大きく異なるものであるが、英国やイタリア、米国、ポーランドなど様々な国で関心が高まりつつある。他方、イタリアでは、1970 年代から、トリエステを中心に、地域精神科医療のモデルが開発されてきた。トリエステモデルは、その思想や実践において、オープンダイアローグと共通する点も多く、トリエステでオープンダイアローグアプローチを導入する動きも始まっていた。また、医療的なアプローチではないが、イギリスでは、当事者に学びの場を提供する「リカバリーカレッジ」の取り組みが進められてきた。当事者の主体性を重視するという点において、リカバリーカレッジはオープンダイアローグやトリエステモデルと共通する。

日本の現状に目を向けると、1950 年代後半以降、順次「脱施設化」が進んだ欧米とは異なり、世界的に突出した精神病床数（約 30 万床）を有し、入院治療が精神科医療の重要な部分を担ってきた。他方で ACT(包括型地域生活支援)の導入が進められるなど、地域精神医療の実践も蓄積されてきている。また、対話的なアプローチに関連する日本独自の実践として、2001 年に北海道の浦河べてるの家で始まり全国に広まった「当事者研究」がある。日本で地域精神科医療を進めていくためには、対話的なアプローチが精神科医療や精神保健福祉の実践においてどのような意義をもつのかを明確化することが必要であるように思われた。

２．研究の目的

以上のような状況を踏まえ、本研究は、(1)対話的アプローチとして、フィンランドで展開されてきた「オープンダイアローグ」、イタリアのトリエステで実施されている「包括システム・包括コミュニティ」アプローチ（トリエステモデル）、そして英国で展開されている「リカバリーカレッジ」の現状と歴史の調査を踏まえ、対話的アプローチの特徴的な実践と構造を明らかにし、その精神医学への影響を考察することを目的として設定した。(2)さらに、そうした考察を通じて、精神医学の社会的基盤を明らかにすることを試みた。

具体的なテーマとしては、①対話的アプローチの実践や導入過程に関する調査、②対話的アプローチの社会学的・医療経済学的分析や思想的基盤の研究、③オープンダイアローグやトリエステモデルが「診断」を重視しないことの意義に関する考察、④オープンダイアローグと当事者研究や ACT との関係の研究、⑤オープンダイアローグのナラティブ・アプローチに対する影響の研究、⑥日本の精神科医医療や他分野へのオープンダイアローグの導入可能性の検討などを研究テーマとして設定した。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究組織は、哲学、精神医学、人類学、社会学など様々な分野の研究者によって構成した。各研究参加者が文献調査・資料収集を通じた研究や現地調査などを進めるとともに、「精神医学の社会的基盤」研究会を本研究のための研究会として開催し、研究参加者や外部の専門家に講演を依頼し、研究討論を行った。

「精神医学の社会的基盤」研究会は以下の通り、11 回開催した。※（　　）内は講演者・発表者。 (1)オープンダイアローグの思想的基盤①（野村直樹）、(2)"Narrative practices and the social ecology of mind in health and illness" （Laurence J. Kirmayer）、(3) オープンダイアローグの思想的基盤②（矢原隆行）、(4)“The Italian forensic psychiatry system in transition: the different trends of change”(Maria Grazia Giannichedda)、(5)“The Intersubjectivity of delusions”(Thomas Fuchs)、(6)ACT(包括型地域支援プログラム）発祥の地マディソン市：マディソンモデル視察報告・講演（久永文恵、山田理絵）、家族療法/ブリーフサイコセラピーから、私が学んだもの・助けられたこと（植村太郎）、(7) ICD-11 と精神障害の分類・診断をめぐって（松本ちひろ、北中淳子、石原孝二）、(8)イタリアの精神保健改革の思想―改革者バザーリアに学ぶ（大熊一夫、大内紀彦、鈴木鉄忠、梶原徹）、(9)“Is diagnosis necessary in mental health interventions? Alternatives beyond DSM-5."(David Cohen)、 (10) 昭和戦前期東京の上層・中層・下層世帯の患者男女別にみた精神病院利用のパターンについて（鈴木晃仁）,「社会福祉」と精神病床増―医療扶助が果たした歴史的役割（後藤基行）, アウトリーチ支援における対話の構造：地域精神保健医療のエスノメソドロジー（浦野茂・下平美智代）、バフチンの哲学と哲学カウンセリング（河野哲也）、 (11) 精神医学の哲学：多元主義と対話的アプローチ（黒木俊秀、斎藤環、糸川昌成、村井俊哉、石原孝二）

この 11 回の研究会のほか、AMED 障害者対策総合研究開発事業(16dk0307066)「当事者を含めた多職種によるリカバリーカレッジ運用のためのガイドラインの開発」(研究代表者:宮本有紀)との共催で、リカバリーカレッジワークショップを 2017 年 4 月 15 日に開催している。また、2017 年 8 月にはオープンダイアローグが開発されたフィンランド・ケロプダス病院のスタッフと「経験専門家」による講演会を開催した（東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム IHS との共催、オープンダイアローグ・ネットワーク・ジャパン後援)。

また、2019年2月には、Open Dialogue Tokyo/Kyoto International Research Meeting（本研究プロジェクト主催、オープンダイアローグ・ネットワーク・ジャパン後援）を東京及び京都で開催し、オープンダイアローグの研究と実践を国際的にけん引するMary Olson氏（米国）、Mark Steven Hopfenbeck氏（ノルウェイ）、Douglas Ziedonis（米国）氏、Shi-Jiuan Wu氏（台湾）に講演を依頼した。本会合にはプロジェクトメンバーおよびオープンダイアローグの研究者などが参加し、オープンダイアローグをめぐる研究状況に関する意見交換と研究討論を行った。

現地調査・実情調査としては、2018年8月29日～9月2日にフィンランド・ケロプダス病院で開催されたThe 23th International Network meeting for the treatment of psychosis に石原と斎藤が参加し、ケロプダス病院スタッフやヤーコ・セイックラ氏など、オープンダイアローグの開発と発展に中心的な役割を果たした実践家たちと意見交換を行った。また、2018年2月には、ロンドンで開催されたInternational Open Dialogue Research Collaboration (IODRC)及びNational Peer Supported Open Dialogue Conferenceに参加した。前者は研究者向けの会議であり、後者は当事者が参加するオープンダイアローグ(peer supported open dialogue)に関する会議である。

さらにオープンダイアローグに関連するアプローチであるACT（包括的地域生活プログラム）の研究を進めるため、平成29年より、浦野を中心として、市川で実施されているACT-Jの支援実践の組織方法の参与観察（フィールドノート）による研究を進めた。

また学会では、科学基礎論学会、家族療法学会、国際理論心理学会(International Society for Theoretical Psychology)などで本研究テーマに関連するシンポジウムやワークショップを開催し、研究討論を行った。

４．研究成果

本研究の成果として、雑誌論文28件、学会発表39 件、書籍（分担執筆を含む）5件を発表した（発表予定を含む）。具体的な成果としては、オープンダイアローグの開発の歴史的経緯と社会的基盤、哲学的・思想的基盤、各国での展開状況を明らかにするとともに、日本への導入可能性について検討した。また、オープンダイアローグとトリエステモデル、当事者研究などのアプローチの共通点と違いについて検討を加えながら、精神医療における対話的アプローチの意義に関する研究を進めた。さらに、生物・心理・社会モデルの再検討、当事者研究の研究、精神疾患診断の社会的影響に関する研究、認知症当事者運動に関する人類学的な視点からの研究なども行った。

オープンダイアローグ開発の歴史的経緯と社会的基盤に関しては、オープンダイアローグが1980年代に開発されていった時期が、フィンランドの脱施設化が進められていった時期であったことなどを指摘するともに、先行するアプローチであるニード・アダプティッド・アプローチ（ニード適合型アプローチ）との関係を明確化した。また、「トリエステモデル」を実現したイタリアのバザーリアによる精神科医療改革などと比べて、オープンダイアローグにおいて、近年まで当事者（「経験専門家」）の存在が比較的目立たなかった背景について考察を行い、最近では、ロンドンなどでのプロジェクトにおいて、「ピアサポートによるオープンダイアローグ」(Peer Supported Open Dialogue)が展開するなど、当事者が参加する新たな取り組みが展開されつつあることを紹介した。

オープンダイアローグの日本への導入可能性については、日本の医療制度と精神科医療文化をオープンダイアローグの7つの原則などと突き合わせながら検討を進めた。オープンダイアローグの原則には即時援助、柔軟性、不確実性への耐性、治療チームの継続性など、現在の日本の精神科医療の現状を踏まえるとすぐに導入することが困難なものが多く含まれる。日本の現状の制度の中で実現可能な実践は何か、オープンダイアローグを本格的に導入するためには、日本の精神科医療がどのように変化する必要があるのかなどについて検討を進めた。

生物・心理・社会モデルに関しては、本モデルの提唱者エンゲルの論文に立ち返り、エンゲルの生物･心理･社会モデルが当事者の経験を重視する側面を有していることなどを指摘した。

日本で展開されてきた独自の活動である当事者研究については、精神科領域における当事者の活動の歴史の中に位置付けやリカバリー思想との関係などについても明確化するとともに、オープンダイアローグとの比較を行った。また、当事者研究に関するエスノメソドロジー的研究も進めてきた。

精神疾患診断の社会的影響に関しては、1980年代以降の世界の精神医学の中心的役割を果たしてきたアメリカ精神医学会のDSMの拡散と変容のプロセスを様々な局面から検討した。また、21世紀に入り精神疾患の病因・病態の科学が多元化（説明的多元主義）したために従来のDSMが依拠する診断のカテゴリー的モデルとのギャップが拡大していることを示した。

認知症当事者運動に関する研究では、日本の精神医学領域における当事者視点の台頭に着目した。特に認知症当事者運動に関して人類学的な視点から研究を行うと同時に、日本の精神医学における語り・対話・精神療法の位置づけについての考察を行った。

こうした研究を進めることにより、精神科医療の社会的基盤を問い直し、精神医療における対話的アプローチの意義を検討してきた。本研究の成果の一部は、現在編集作業が進められている『オープンダイアローグの哲学』（仮題・石原孝二、斎藤環編、全2巻）の各章として出

版される予定である。本書には、オープンダイアローグの思想の基盤としてのバフチン哲学の検討（河野）、現象学との比較（石原）、障害者運動との比較（熊谷）、ACT との比較（伊藤、共著）、地域精神医療との比較（下平）などが含まれる予定となっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 28 件）

① Junko Kitanaka, In the Mind of Dementia: Neurobiological Empathy, Incommensurability, and the Dementia Tojisha Movement in Japan、Medical Anthropology Quarterly, 査読有、2019（印刷中）

② 石原孝二、分類は何のためか：診断バイアスと相互作用、精神科、査読無、34 巻(3 号)、293-297 頁、2019 年

③ 黒木俊秀、DSM 時代の終焉と多元主義的言説の台頭、臨床評価、査読有、46 号、513-524 頁、2019 年

④ 黒木俊秀、精神療法と薬物療法の治療的接点―二元論的対立から一元論的統合へ―、臨床精神薬理、査読無、21 巻、591-599 頁、2018 年

⑤ 斎藤環、オープンダイアローグの日本への導入に際して懸念されること、精神科治療学、査読無、33 巻(3 号)、275-282 頁、2018 年

⑥ 斎藤環、森川すいめい、西村秋生、オープンダイアローグ（開かれた対話）による統合失調症への治療的アプローチ、精神科治療学、査読有、32 巻(5 号) 、689-696 頁、2017 年

⑦ 斎藤環、オープンダイアローグ総論、思春期学、査読無、36 巻(2 号)、213-219 頁、2018 年

⑧ 石原孝二、オープンダイアローグと当事者―フィンランドの精神保健政策とオープンダイアローグ―、精神科治療学、査読無、33 巻(3 号)、331-335 頁、2018 年

⑨ 北中淳子、医療人類学のナラティヴ研究 ： その功罪と認知症研究における今後の可能性、ナラティヴとケア、査読無、10 号、11-18 頁、2018 年

⑩ 石原孝二、当事者研究の哲学的・思想的基盤、臨床心理学、査読無、増刊 9 号:、51-55 頁、2017 年

⑪ 石原孝二、メンタルヘルスと精神医学における対話的アプローチ：トリエステモデルとオープンダイアローグ、心と社会、査読無、48 巻(4 号)、64-68 頁、2017 年

⑫ 黒木俊秀、エビデンスを超えて通い合う、日本サイコセラピー学会雑誌、査読無、17 巻(1 号)、5-13 頁、2016 年

〔学会発表〕（計 39 件）

① Kohji Ishihara, Development and Challenges of the Open Dialogue Approach in Japan, International Open Dialogue Research Meeting. (2018)

② 斎藤環、オープンダイアローグの展開－開かれた対話とは－人間性心理学会第 37 回大会.(2018)

③ Junko Kitanaka, Introduction: Remaking the Social: Mapping Mental Health Care in East Asia, American Anthropological Association. (2018)

④ 河野哲也、今なぜ「子ども」に当事者研究が必要なのか、第 15 回当事者研究全国交流会名古屋大会. (2018)

⑤ Shimodaira, Michiyo, Dialogical Practice of an ACT team, The 17th Biennial Conference of The ISTP (International Society for Theoretical Psychology). (2017)

⑥ Kohji Ishihara, Tojisha-Kenkyu and the Open Dialogue Approach: A Comparative Study, The 17th Biennial Conference of The ISTP (International Society for Theoretical Psychology). (2017)

⑦ 熊谷晋一郎、当事者研究への招待、第 60 回日本病院・地域精神医学会総会.(2017)

⑧ 糸川昌成、心はどこへつながるのか―分子生物学からポリネシアまで、第 12 回日本統合失調症学会.(2017)

⑨ Akihito Suzuki, Therapy, Care, and Punishment in the Parallel World: The Family and the Psychiatric Hospital in Tokyo ca. 1920-1945, Symposium on the History of Gender and Medicine in Japan (Johns Hopkins University). (2016)

⑩ 北中淳子、グローバル・メンタルヘルスにおける文化、日本精神神経学会学術総会.(2016)

⑪ Shigeru Urano, Yoshifumi Mizukawa and Kazuo Nakamura, Creating “Idiom of Distress” Colaboratively: An Analysis of Practices of Self-Directed Research by People with Mental Distress. 3rd International Sociological Association Forum of Sociology. (2016)

⑫ Kohji Ishihara, Toward a new approach to neurophenomenology: The significance of Tojisha-Kenkyu (study by afflicted persons themselves) for neurophenomenology, Nordic Society for Phenomenology Annual Conference: Phenomenology and Beyond. (2016)

〔図書〕（計５件）
① 斎藤環、オープンダイアローグが開く精神科医療、日本評論社、2019 年（印刷中）
② 浦野茂、発達障害を捉えなおす-制度的支援の場における当事者の実践（榊原賢二郎編『障害の社会学（仮題）、分担執筆）、新曜社、2019 年（印刷中）
③ 石原孝二、精神障害を哲学する：分類から対話へ、東京大学出版会、332 頁、2018 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
JSPS 科研費「精神医学の社会的基盤」https://social-basis-of-psychiatry.jimdo.com/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：斎藤　環
ローマ字氏名：Tamaki Saito
所属研究機関名：筑波大学
部局名：医学医療系
職名：教授
研究者番号（8 桁）：40521183

研究分担者氏名：浦野　茂
ローマ字氏名：Shigeru Urano
所属研究機関名：三重県立大学
部局名：看護学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80347830

研究分担者氏名：熊谷　晋一郎
ローマ字氏名：Shinichiro Kumagaya
所属研究機関名：東京大学
部局名：先端科学技術研究センター
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00574659

研究分担者氏名：糸川　昌成
ローマ字氏名：Masanari Itokawa
所属研究機関名：公益財団法人東京都医学総合研究所
部局名：精神行動医学研究分野
職名：副所長
研究者番号（8 桁）：40332324

研究分担者氏名：黒木　俊秀
ローマ字氏名：Toshihide Kuroki
所属研究機関名：九州大学
部局名：人間環境学研究院

職名：教授
研究者番号（8 桁）：60215093

研究分担者氏名：北中　淳子
ローマ字氏名：Junko Kitanaka
所属研究機関名：慶應義塾大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20383945

研究分担者氏名：鈴木　晃仁
ローマ字氏名：Akihito Suzuki
所属研究機関名：慶應義塾大学
部局名：経済学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80296730

研究分担者氏名：河野哲也
ローマ字氏名：Tetsuya Kono
所属研究機関名：立教大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60384715

(2)研究協力者
研究協力者氏名：山田理絵
ローマ字氏名：Rie Yamada

研究協力者氏名：村井俊哉
ローマ字氏名：Toshiya Mura

研究協力者氏名：後藤基行
ローマ字氏名：Motoyuki Goto

研究協力者氏名：伊藤順一郎
ローマ字氏名：Junichiro Ito

研究協力者氏名：向谷地生良
ローマ字氏名：Ikuyoshi Mukaiyachi

研究協力者氏名：下平美智代
ローマ字氏名：Michiro Shimodaira

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。